

番外――

ルービンシュタイン

(ピアニスト)

Artur Rubinstein

「ジョージ・セル夫人が聴きに來ているよ。音楽会の終わった後のデイナーもいっしょのはずだ」

オーケストラの音合わせも終わり、これから舞台に二人で出て行こうという時に、ルービンシュタインが嬉しそうにぼくに囁いた。ささや演奏の直前にショッキングなことを聞かされるのは、大変に困る。もつともルービンシュタインは、一年前に亡くなった偉大な指揮者ジョージ・セルの未亡人が、わざわざ音楽會に來てくれたのが嬉しくてたまらないから、ぼくに言っただし、自分と同じようにぼくも嬉しいと思つて言つてくれたのだろう。だがぼくにはショックだったのだ。大指揮者ジョージ・セルには個人的に面識がなかったし、遠くから拝むとか、レコードを通じてとても尊敬

していた。セルの奥さんという人ももちろん知らない。ジョージ・セルが聴きに來ているのならともかく、その未亡人が來ているだけでぼくが緊張するのは、考えてみるとおかしい話だが、でもその時は、ワア、大変だ、セルの奥さんが來ているのならうまくやらなければ、などと緊張して、余計な力も入ろうというものだ。

チューリッヒのトーン・ハレ・オーケストラとの音楽会だった。ただ音楽会と書くのはちよつと正確でないかもしれない。要するに、ルービンシュタインの夕べとも言うべき音楽会で、十年ぐらい前のことだが、ルービンシュタインのような、世界で最も愛され、尊敬された巨匠が、ヨーロッパのオーケストラの定期演奏会で一曲だけのコンチェルトを弾くということは、まずなかった。だからこの音楽会は、ぼくの音楽会というわけにはいかない。ぼくは完全な伴奏者の役だった。ルービンシュタインは当時とてもぼくをかわいがってくれて、こういう音楽会をやるたびに、ぼくを指名した。この時のトーン・ハレ・オーケストラは、もちろんヨーロッパの一流オーケストラではあるけれど、どちらかというところ堅く冷たい感じのするオーケストラで、いわゆる燃えるような演奏をするタイプではない。こういうオーケストラとの練習の時、ルービンシュタインはたちまちナーヴアスになり、機嫌が悪くなった。誰ととても仲良くなり、いつも楽しそうに見えても、この巨匠は、実は大変にナイーヴな人で、とても人見知りでもある。だから、練習の時オーケストラの演

奏に少々不満があると、やたらにぼくにあたりちらす。この朝オーケストラとの最後の練習で、ルービンシュタインはシューマンのコンチェルトの出だしのところを忘れてしまい、二、三回失敗して、ぼくはオーケストラの前で、あたりちらされたのだ。この偉大な巨匠の癖をぼくはよくわかっているから、あたりちらされるままに練習を終え、ルービンシュタインはぼくを昼食に誘った。本来にこの人は大変にてれ屋なのだ。見知らぬ顔のオーケストラに不満をぶつつけることができないからのとぼつちりの被害者のぼくに、予定になかった昼食をご馳走してくれたわけである。レストランに坐った途端に、世界中が知っているあのニコニコ顔の幸福なルービンシュタインに戻って、あとからあとから冗談話も飛び出すし、笑いながらオーケストラの悪口も言っている。さつきは、ピアノの上の方の鍵盤が湿っていると云って、ぼくを怒鳴りつけ、こちらはしょうがないから自分のハンカチで拭いてやったりしたが、このおじいさん、虫の居所の悪さをぼくにぶつけることしかできなかったのだとわかりすぎるくらいわかっているのだ、こう言っちゃなんだが、余計にカワユクなる。ルービンシュタインは、世界でぼくが最も尊敬するピアニストだし、一番好きな人でもあり、ぼくを世界中で紹介してくれた恩人でもある。

音楽会の後、三十分くらい車で山をあがり、チューリッヒの湖を見下ろす大層金持ちそうな家でのパーティに行った。ヨーロッパに限らず、アメリカでもよくこういうパーティがあるのだが、大

金持ちの音楽ファンがどの国にもいるということだ。こういうパーティはたいいてい同じ形式で、その家の大広間に招待された何十人かの人のカクテルを飲んでいる。パーティの主催者の知り合いで、さっきの音楽会を聴いていた善男善女のおしゃべり大会である。彼らはぼくたち出演者とは違い、音楽会が終わるとそのままこの家まで来ている。こちらは楽屋で汗だくの燕尾服を着替えなければならぬ。そのままでは必ず風邪をひくし、着替えた後は楽屋にやって来るファンにサインするのにも時間がかかる。もつとも、ルービンシュタインほどの大物となると、汗などかかないから、巨匠はピッチとした燕尾のままディナーにもいらつしやる。だが、彼には大量のファンが押しかけるから、結局は、我々のパーティへの到着は、お客さんたちより四、五十分は遅れてしまう。

玄関に入り、待ちかまえていた主人に大広間に連れて行かれる。そこで必ず変な拍手をあびる。変な、と書いたのは、全員が必ずなんらかのグラスを片手にしているからで、空いている方の手で胸とか、グラスを持つている手の腕なんかをたたくので、変な音になるのだ。

まっ先にルービンシュタインは、ぼくをセルの未亡人に紹介した。恭しく挨拶したが、後から後から善男善女の大群に紹介されるので、こちらも忙しい。こういうパーティでは、ひとしきりグラスでの歓談のあと、メインゲストは別室に招き入れられ、当家の主人と小人数で正式なディナーが始まるものだ。当日のメインはもちろんルービンシュタインだ。彼にくつついた形でぼくも無論メ

インである。あと数人いたが、この中に当然ジョージ・セル未亡人もいる。あちらの大広間でまだ飲んでいるたくさんの人たちは、いつまでもガヤガヤやっているが、彼らは八時とか八時半に始まる音楽会に来る前、食事をして来ている。音楽家のほとんどは、音楽会の前には食べないから、我々がいかに特権階級のように別室に招き入れられても、なにしろお腹がすいているのだ、当然の権利だとも言える。このメインの部屋でわれわれといっしょにディナーを食べる人は、それこそ特権階級的な人というわけで、だから、相当なジイサン、バアサンばかりである。

ぼくは再び緊張した。なにしろセルの奥さんといっしょにごはんを食べるのだ。大きなテーブルの真ん中にルービンシュタインが坐り、ぼくはその正面だった。ルービンシュタインの右隣に品のよいおばあさんが坐っていた。スープが終わった頃、ぼくはこのおばあさんに丁寧に話しかけた。

「先生のことを、長い間尊敬していました。先生のレコードをぼくはほとんど買っていますし、先生のレコードほど参考になり、勉強になるレコードは他にありません。お亡くなりになられて、本当に……」

突然、ぼくの向こう脛すねが誰かに蹴きつ飛ばされた。おばあさんにぼくが話し出した時、人の足を軽く踏むヤツがあるとは思っていたが、こういう金持ちの家には大きな犬がいたりして、テーブルの下に寝そべっていたりすることがあるのだ。すぐその後で踏む力が加わったのだが、ぼくは気にも

かけなかった。蹴っ飛ばされるとなると、これは人間がやっただけに決まっている。靴の先でガツンなのだから、かなり痛い。当然正面の人間の仕業に違いない。おばあさんへの話しかけを中断して前を見たら、ルービンシュタインの顔が随分下に見えた。彼はガッチリした体格だが、かなり小さい人だし、顔をテーブルぎりぎりまで下げ、足をのばしてぼくを蹴っ飛ばしていたのだ。何故かぼくを睨^{にら}んでいる。

「私の主人はレコードなぞいれなかったと思いますが」

とおばあさんが言い、

「いえいえそんなことは……」

とぼくが続けると、もう一発ガツンと蹴っ飛ばされた。ウインクというのはたいていニヤニヤしながらする感じが強いものだが、あんなに恐いウインクを見たことはなかった。ルービンシュタインに恐い顔のウインクをされたのは、ぼくぐらいかもしれない。なんだかまずいことを言ってしまったような気がして、ぼくは話題をかえた。ルービンシュタインの顔は元の位置に戻って、再びあのニコニコの顔になって楽しい話が続いた。話題がなんてことのない話に戻ってから気がついたのだが、このおばあさん耳が相当遠くて、誰の話も半分以上わからないらしかった。ルービンシュタインもこれに気がついたとみえて、話の合間にぼくにそつと小声で鋭く言った。「オレの隣はオレ

もよく知らないが、だいぶ前に死んだ、地元の昔の指揮者の奥さんらしいぞ。セルの奥さんはずっと右のテーブルの端だ」

あつと驚いた。さつき大勢の中で紹介されたので、それっきり顔を忘れてしまっていたのだ。だからぼくはかなり歳をとったおばあさんを巨匠のセルにふさわしい未亡人と思い込んでしまったのだ。本物のセルの奥さんはわりと若かった。外国の音楽家の巨匠たちの離婚率というのは、日本の音楽家たちのそれよりもはるかに高いのではないだろうか。老巨匠の奥さん、即ち老婦人と思うととんでもないことになる。

ルービンシュタインとの初対面は、東京のホテルニューオータニの特別室だった。ルービンシュタインを読売新聞社が招いて、ぼくが読売交響楽団と東京で三回の音楽会をやることになった。三回の音楽会で彼は八つのコンチェルトを弾いたのだ。最初と二番めの音楽会が三つずつのコンチェルトで、東京文化会館でやり、三番めはチャイコフスキーとベートーヴェンの「皇帝」の二曲を武道館でやった。

一番最初の練習の前日に、ルービンシュタインが打ち合わせをしたいということで、ぼくはホテルに彼を訪ねた。エレベーターが上っている間中、ぼくは生きた心地がしなかった。幸いエレベーターの中には誰もいなくて、エレベーター内が禁煙なんていうことは百も承知だが、気をおちつける

ために、タバコに火をつけた。煙をすったかすわないところで目的の階についてしまい、廊下の灰皿に長いのを押しつけ、もう一度深呼吸をして、教わった部屋のドアをノックした。勢いよくドアが開いて、映画「カーネギーホール」や、レコードのジャケットでお馴染みのあの顔が、やあ、イワキさん待っていました、と大きな声でいい、ぼくは握手するのも畏れおおく、最敬礼したのだつた。特別室のスイトには、二台のスタインウェイの大型が置いてあつて、コンチェルトの打ち合わせというからには、こちらもオーケストラのパートを二台めのピアノで弾かなければならないのかと、蒼白そうはくになった。幸いそういうことはなく、ピアノの前は素通りして、別の部屋に招き入れられた。飲みものも用意されていて、坐るなり、ルービンシュタインが言った。

「演奏していて、なにか気がついたことがあつたら、なんでも言つて下さい。いつしよにやる指揮者に忠告されると、本当にためになります」

ぼくは仰天した。同時に、この人ちよつとおかしいんじゃないかとも思った。ぼくみたいなチンピラに、世界最大の巨匠がこんなことを言うなんて、初対面の挨拶にしても礼儀とか謙虚とかを通りこして、オーバーすぎる。それから、なんのことはない四方山話よもやまをして、肝心のコンチェルトの打ち合わせはなにもしなかった。もつとも短期間に八曲のコンチェルトをやるのだ。八曲分の打ち合わせなんかいつぺんにやれるものではない。段々わかつてきた。ルービンシュタインは、ぼく

という初対面の、見たことも聞いたこともない若い指揮者と、とにかく一度しゃべってみたかったらしいのだ。料理の話、ワインの話、なんかになつて、突然彼は、隣の部屋の様子をうかがうような顔をして小さな声になつた。隣のスイトには、奥さんと当時十七歳ぐらいだったお嬢さんがいたのだ。

「イワキさん、あなたはまだ三十の真ん中ぐらいだろうが、わたしはね、四十五になるまでは、女のことだけを考えてましたよ。音楽に一生懸命になつたのは、それからです。あなたの歳の頃には、まだ音楽にだけ夢中になつてはいけませんよ」

と言つて今度は大きな声で笑うのだ。あの時ルービンシュタインはもう八十か八十一だったはずだ。

翌日の最初の練習で、ぼくは緊張の極だった。長くなるが、二日おきぐらいの短期間にやった八曲のコンチエルトは、さつき書いた二曲以外の曲を書く、順不同だが、ショパンの二番、サンサーンスの二番、モーツァルトの二短調、シューマン、ベートーヴェンの三番、四番だった。この歳になると、自分の引き出しの中から、その時その時の曲を引き出して人の前でやるだけで、だから、演奏の直前に突然曲目を変更しても同じことなのだ、とか、自分は練習が嫌いなたちなので、部屋で一人でさらっていると全然一生懸命やらないものだからなんにもならないから、お客の前で

やる時が、その曲の次の時のための練習だと思っている。お客がいっぱいいると一生懸命に練習ができる、など恐ろしいことを言って笑うのだ。

最初の日練習がサンサースとショパンで、この両方ともぼくはその時までまだ指揮をしたことがなかった。ショパンの一番はさんざんやっていたが、二番の方は、特に二楽章の合わせが難しすぎるので、それまでいつも敬遠していた報いがきたのだった。後悔したがもう遅い。これまで逃げまわっていた曲を、あのルービンシュタインと最初にやるはめになるとは。正直を言うと、前の晩ぼくは完全に一睡もしなかった。徹夜して勉強した。ルービンシュタインがどうルバートしてもついていけるように準備をしたら、夜が明けてしまったのだ。

文化会館の楽屋に朝早く着いて、ぼくはもう一回スコアを睨んでいた。いきなりドアを誰かがノックして、

「マエストロ！ グーテン・モルゲン！」

と本当のマエストロが入って来た。

緊張の最初の音合わせが終わって休憩になり、彼はコーヒーを飲みたいと言った。どこから取り寄せると時間がかかるし、この文化会館の中に食堂がありますが、ガヤガヤしていますよ、と言ったが、そんなことはちっともかまわないと言って、八十歳のルービンシュタインはスタスタ歩き

出した。

文化会館の食堂に坐り、周り中の人が尊敬と好奇の入り混じったジロジロの無数の目の矢を注いでいる中で、彼は陽気にしゃべるのだった。始まると止まらない。

「あんたの国はおもしろい国だね。この間の記者会見でビートルズをどう思うかと聞くから、とばけて、あの車は小さくてガタガタするから、もう何年も乗っていないと言ってやったが、わかっただろうかね」

フォルクスワーゲンは英語圏ではカブト虫、つまりビートルとも言われていたのだ。

「この間もどこかの国で連中とかち合った。大きな会場だったが、わたしの方が千人客が多かった。わたしはビートルズに勝ってしまったよ。あいつらの音楽会にはおまわりが中に千人入っていたのでね。わたしの方にはおまわりがいらなかったから、それだけお客が多かったわけさ、ハハハ……」

その日、ちょうどビートルズが武道館で、あの歴史的な日本での演奏会をやったのだった。その同じ会場で、一週間後に自分の日本での最後の演奏会をやることを、後はちゃんと知っていたのだ。

「イワキさん、カツラを二つ買って来てくれないかな。一週間前の連中と同じ頭のカッコウをし

て、二人でやらないかね」

そんな冗談ばかりを言っているうちに、休憩が終わりになって、二人して文化会館の客席をテクテク歩いてステージに戻った。

二晩の上野文化会館の演奏会が終わって、いよいよ武道館での練習の日が来た。ああいう大きな会場というのは、いったいどうなっているのだろう。朝の練習のために会場に入った途端に、蚊の大群の猛烈な襲撃を受けたのだ。蚊というのは、汚い水溜り^{たま}がある所にいっぱいいるものだとは知っていたが、読売日響のオーケストラの人たちや、ルービンシュタインやぼくは、楽屋にいても、ドデンと広い武道館の中に特設されたステージに上がっている時も、絶えず蚊にさされたのだ。ベートーヴェンの「皇帝」の練習が始まり、この曲は最初にピアノが豪快なカデンツアの後、相当長い間オーケストラだけの演奏がある。その間中、ほとんど一小節に一回ぐらいの割合で、ぼくの左側のうしろ、つまりピアノのソリストの位置で手を打つ音が聞こえた。それも、小節の第一拍ごとにちゃんとリズムに合って、オーケストラがフォルテの時は大きく、ピアノニッシモのところでは柔らかく。そして音源は必ずしも一箇所ではなく、縦、横約一・五メートルの空間を動きまわっていた。最初はなんのことだかわからなかったし、この一週間いつもいっしょにいたとはいえ、やはりルービンシュタインとの練習は常に緊張で、ぼくにはその音の方を振り返る余裕はなかった。それ

に、ぼく自身は蚊のことを忘れていた。指揮者というものは、いつも手を振りまわしているので、練習を始めてからは、ぼくは蚊にさされることがなかったのだ。ピアノが出てくるちよつと前に、オーケストラを止めて、注文を出した。その時に、ルービンシュタインがピアノの席から立ち上がって、ぼくに近づいた。いつでも嬉しそうな、幸福そのもののトレードマークの顔をしている人だが、あんなにニコニコした顔のルービンシュタインを、その後見たことがない。

「わたしはね、これまでオーケストラの練習の時に、こんなに沢山の蚊をとったことはない。もう三十匹やつつけた」

ピアノを弾き出してから、ちよつとの休止符の一瞬にも、巨匠は蚊をとり続けた。

その晩の本番は約一万五千のお客だったということだ。真ん中の平土間に並べられた椅子全部と、武道館本来の観客席も、見渡す限りのお客で、もしかしたら、おまわりさんの数だけ、やはりルービンシュタインは、ビートルズに勝ったかもしれない。後で聞いたら一週間前のビートルズ以来、武道館では興行その他がなにもなく、ガランドウのままになっていたそう。そういう時に蚊というのは集団発生するものだろうか。

朝の練習の後半、蚊は大分減った。休憩の間に、主催者があわてふためいてステージの周りにD TだかB H Cだかを、まるで雪が積ったように撒き散らしたのだった。今はもうその種の葉は、

人間への害が強すぎるから禁止されたが、オーケストラの何人かが練習中に気持ちが悪くなったくらいだったのである。ぼくもちよつと吐きつぽくなくなった。だがおじいさんはびくともしない。この巨匠の体力というか人間力はもうバケモノとしか言いようがない。

後にぼくがメキシコの音楽祭にN響と行って、なにしろ着いた日にもう演奏会だったので、あの有名な空気の薄さに全員がやられたことがある。二千メートル近い高所だから、メキシコオリンピックの時も世界中の選手が、何週間も前に到着して、空気の薄さに慣れようとした所である。ちょうど我々の二日前がルービンシュタインの音楽会だった。入れ違いだったので会えなかったけれど、次に会った時、変になりませんでしたかと尋ねたら、いや、ゼーンゼン、と言っていた。みんなが苦しむ時差なんかも感じないらしい。

武道館の音楽会が終わり、ルービンシュタインの車に若いファンが殺到し、次に続くぼくの車も何百人に囲まれて、これはおそらくどっちの車にルービンシュタインが乗っているかわからなかったからだろうが、狂喜乱舞の若者たちが車の屋根の上に飛び乗って踊り出し、車は何十分も立ち往生で、大変恐かった。この時ばかりはルービンシュタインも、少しお客が減ってもいいから、整理のおまわりさんが欲しかったろう。

何年かたってぼくがハーグのオーケストラの常任をやっていた時、ルービンシュタインに、二日

間弾いてもらったことがある。大分以前にこのオーケストラとやった時、その時の指揮者を彼が非常に気に入らず、あのオーケストラとは二度と共演しない、とルービンシュタインが自分のマナージャーに言っていたと聞いていた。例のチューリッヒの音楽会の後のパーティで、ジョージ・セルの奥さんとまちがえてトンチンカンなことを言い出したぼくの足を蹴つ飛ばして、ディナーの後にまた沢山の人が飲んでいるラウンジに歩きながら、ぼくの失敗をゲラゲラ機嫌よくからかうルービンシュタインに、チャンスとばかり頼み込んだ。

「ねえ、先生、ハーグ・フィルは今ほくがやっているオーケストラだから、いいでしょう？ ぼくを助けて下さいよ」

彼は快諾してくれて、何年ぶりかで、ハーグでの彼の演奏会が実現したのだった。

二晩同じプログラムだったが、何かのオーバーチュアをぼくがやった後、ショパンの第二協奏曲、休憩があつて、ベートーヴェンの「皇帝」だった。この時彼はいくつだったのだろう。最初に会ってからもう数年たっていたのだが、この歳までも彼の音楽は明らかに進歩というか前進が続いていた。音楽がますます偉大になってきた。世界人類史上奇蹟としか思えないことだ。だが、やはり歳は歳で、調子の悪い時には、時に歳を思わせることもぼつぼつ始まっていたし、突然、演奏の途中で忘れてしまったりすることもあるようになってきた。若いバリバリの演奏家だって、時々こ

んなことをやっているのだから、あたりまえの話だが、八十を過ぎるまではそのようなスキが彼には絶無に近かったことは、世間周知のことだ。

ハーグの音楽会で、ショパンの二楽章の真ん中ぐらいから、何故か彼のピアノがちよつとおかしくなってきた。三楽章に入り、メロメロははつきりわかるようになって、終わった時、彼はお客に深々と頭を下げ、こんな演奏をお聞かせして申し訳ありません、とつぶやいているのをぼくは聞いた。一緒におじぎをしていたから聞こえたのだが、勿論、聴衆にわかった筈はない。お客はこの老巨匠にわれるような拍手を送ったが、ルービンシュタインは楽屋に引つ込んだままで、ステージに再び現われず、そのまま休憩になった。

彼の楽屋に行った。目をつりあげて怒っている。オーケストラの関係者、マネージャーがオロオロしている。ぼくは聞いた。

「マエストロ、何を怒っているのですか。機嫌を直して次のベートーヴェンをやりましょうよ」
「コーヒーを持って来てくれ！ 濃いのを五つだ！」

なおも子供のようにわめき続けるルービンシュタインをなだめすかしながら、何を怒っているのかを聞き出した。

彼はその朝起きた時にちよつと風邪気味だったのだそうだ。ルービンシュタインの奥さんはこの

日の午後にスペインに飛ぶことになっていた。世界中にいくつかある彼の別荘の一つで、ハーグの音楽会を終えた後、巨匠が休養をとるために、亭主を残して、彼女は、家を片付けに行ったのだ。しかし奥さんは心配でならないから、午後ホテルにお医者さんと呼んでおいた。ルービンシュタインはものすごい医者嫌いである。

「いやがるオレに無理矢理医者を押しつけて、彼女は行ってしまった。その医者というのが、ワシの胸をはだけさせて聴診器をあてた。口をアーンなんかさせやがって、風邪だなどぬかしやがった。それだけならまだしも、クスリを無理矢理口の中に何錠かおしこんで、行っちゃった」

老巨匠は大のクスリ嫌いでもあり、すべてを知っている奥さんは、その夜の音楽会が心配のあまり、前もって医者に見打ちしておいたらしい。医者には、ふいうちに口に錠剤を入れられた無念さは、よくわかる。風邪グスリには飲んだ後眠くなるのが多い。その眠けとボンヤリが、今のショパンの二楽章の途中から急に出てきたのだそうだ。

「もう離縁じゃ！ 医者なんか、みんな世界中死んじまえ！ とにかくワシは、永久にもう医者とは口をきかないぞ」

コーヒーが届いた。彼はガブガブコーヒーを飲み始めた。なにしろ濃いのを五杯注文したのだから、我々は心配になって、

「先生、二杯だけにしといたら……」

など一生懸命止めるのだが、言うことをきかない。五杯とも飲んでしまった。

「今日のお客はさっきのメロメロシヨパンで、もうルービンシュタインもおしまいだと思っているだろう。絶対にワシは挽回^{ばんかい}する。してみせる」

急に彼の顔は輝いて、いつもの赤ん坊のようなツヤツヤの肌の色になった。目も三角でなくなり、いつもの陽気なルービンシュタインになった。そんなに早くコーヒーが効いたとは思えないが、気のせいで老巨匠がこんなに元気になってしまったのにも驚く。朝からほとんど何も食べていないという彼の胃も心配である。

ちよつと長めにしてあつた休憩が終わり、ベートーヴェンが始まって、ぼくは驚嘆した。こんなことを口ではよく言えないが、彼はとにかく信じられないほどの最高の演奏をしたのである。急に四十歳ぐらい若返つたような感じだった。コンチェルトが終わり、これだけ名演したのだからもういいだろうと思うのだが、ルービンシュタインは五曲もアンコールを弾いた。それも、「小犬のワルツ」なんかのような短い曲ではない。「英雄ポロネーズ」のような長い大曲を、何曲も何曲も弾くのだった。彼がアンコールを弾いている間、ぼくはステージの横で息を殺していた。一曲弾いて戻ってくる。客席のブラボーの声はますます高くなる。彼はステージに戻ってゆく。往復のたび

に、

「今度は何を弾こうか。何がいいと思う？」

なんていいながらステージに戻り、次のアンコール曲を弾くつもりでピアノの前に坐って、それからしばらく考えたりしている。そんじょそこらのピアニストなら、音楽会で弾くであろうアンコール曲を、前もって用意し、練習しておくものだが、彼は自分の無数の引き出しから咄嗟に引き出して、弾き始めるらしい。

もう今度が五曲めのアンコールという時、マネージャーが舞台のソデで頼み込んで、彼にオーバーを着せた。オーバーを着込んだ彼が又ステージに出て行く。これでもうおしまいというゼスチュアをしたが、お客は承知しない。そこでオーバーを着たまま彼はショパンの「ノクターン」を静かに弾き始めた。もうこの時彼は八十代の半ばなのだ。こういうシーンがあと何年見られるだろうかと思うと、ぼくはどうしても泣けてくるのだった。

やっと音楽会が終わって、オレは見事に挽回したぞ、と上機嫌のルービンシュタインを囲んで、ハーグの一番おいしいフランス料理屋で関係者のパーティをやった。上機嫌の彼のしゃべること、しゃべること。それよりも、その食べっぷりにも、いつものことながらあきれるのだ。

彼はいつも極上のハバナの葉巻を持っている。胸のポケットに必ず三本入っている。その時は、

キューバで演奏した後、カストロ首相が贈ってくれた、とかのを持っていて、「ルービンシュタイン」と名付けられたものだった。アメリカはキューバに禁輸措置をとっている。だが、カストロ首相がルービンシュタインのアメリカの家に、定期的に贈ってくるこの葉巻だけは、アメリカ政府は黙認しているのだそうだ。

一応の節制をしているつもりなのか、彼は夕食の後に一本か二本の葉巻をくゆらすだけである。それが又嬉しそうに、楽しそうにくゆらすのだ。ぼくはルービンシュタインの葉巻の弟子でもある。吸い口の切り方、火のつけ方、ちよつと乾きすぎている時にそつと嘗^なめるやり方、くゆらせ方のすべてを、ぼくは彼に習ったのだ。ただし、胸の三本の葉巻は、よほど機嫌のいい時でないとくれない。

この晩の上機嫌なら、「ルービンシュタイン」をくれるのはまちがいないだろう。テーブルの彼の正面にいたぼくは、そつと立ち上がって彼の後にまわり、後から手をのぼして、彼の胸のポケットから一本盗んだ。みんなに昔話をしているルービンシュタインは、気がつかない。ぼくは席に戻って、葉巻を高くさしあげ、ヘッヘッとルービンシュタインの目の前に突き出した。大笑いになり、

「こういうめにいつも遇^あうから、この男と音楽会をやる時、わたしはいつもより多めの葉巻を用意

してくるのだ」

たちまち葉巻の吸い方の楽しいレッスンが再び始まった。

ルービンシュタインは、もう九十を越えた。二年ほど前に目が完全に不自由になって、公開の演奏から引退した。世界中の音楽ファンを、いつも幸福にさせていた何十年の演奏生活だったが、戦後はドイツとオーストリーにだけは、ついに絶対に行かなかった。ユダヤ人として決してナチスを許さなかった。何人かの肉親が虐殺されたこと、及びとにかくナチスの思想と政治を許さなかった。世界的な音楽家では前にも書いたが、アイザック・スターンとルービンシュタインの二人がこの姿勢を最後までくずさない。

ルービンシュタインは、今は主にパリに住んでいるが、ぼくはパリに行くたびに悩む。彼の住所も電話番号もぼくは持っている。訪ねて行ったら喜んでくれるだろう。なつかしがってくれるだろう。だがこれがぼくの日本人的なところなのか、東洋人的なところなのか、今は目が不自由になって、自分だけのために時々ピアノを弾いたり、回想録を口述したりして静かに暮している老巨匠を、そつとしておいてあげたいという気持ちがある。本当は行くべきなのだ。ルービンシュタインは、だが、恐ろしくおしやれな人でもあった。今の今までダンディを通して。ぼくをかわいがってくれた大恩人が、不自由になった自分を人に見せるのが、もしかしたら苦痛であるかもしれない

いという気持ちがぼくにはある。あともうちよつとで百歳なのだ。やつぱり訪問しよう、いや遠慮しようと思ひ迷いながら時間が過ぎてゆく。